

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 17 日現在

機関番号：17702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02721

研究課題名(和文) トップアスリートの海外遠征用英語学習ソフトの開発

研究課題名(英文) Study of English Materials for Top Athletes to Join Overseas Competitions

研究代表者

吉重 美紀 (YOSHISHIGE, MIKI)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：80156265

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル時代を迎え、トップアスリートに限らず実際に英語でコミュニケーションすることは必須である。この研究は、オリンピックなど国際大会や海外遠征に参加するトップアスリートが、英語でコミュニケーションできるよう、英語学習ソフトの開発を目的に行われた。アスリートの英語コミュニケーションが必要な場面は2つある。入国・宿泊・買物・移動など旅行者としての場面と、試合前の準備や練習・試合・応援・怪我と治療・試合記事等アスリート特有の場面である。アスリート特有の場面は、さまざまな競技に共通する場面に絞ることとした。最終年度製本まで至らなかったが、簡易ペーパー版を今後勤務校の授業等で試用した後、製本したい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スポーツは今や主要な一文化となり、トップアスリートが国際大会に参加する機会は多いが、アスリートを対象としたESP教育は従前ほとんど研究されておらず教材も少ない。国際舞台でアスリートがその練習成果を発揮できるには、英語による意思疎通がきわめて重要である。教材は、アスリートの英語コミュニケーション能力の向上と競技力向上につながり、最終的には英語教育だけでなく我が国のスポーツの発展に寄与する。

研究成果の概要(英文)：In our globalized society, it is essential for top athletes to be able to communicate in English. The purpose of this study is to develop English materials for top athletes to prepare for their overseas training and competitions. The study indicated that top athletes are expected to encounter two kinds of situations abroad; one which tourists have, such as immigration, accommodations, shopping and transportation, and another unique to athletes, such as their practice, competitions, cheering and supporting teams, injury and treatment, and understanding media reports. Regarding the latter situation, we have decided to include those which any sporting event has in common. Our material is a small pamphlet covering these two situations with vocabulary and phrases.

研究分野：人文学

キーワード：トップアスリート スポーツ 海外遠征 コミュニケーション場面

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 大学英語教育において ESP 教育の必要性が叫ばれるようになって久しい。ESP 教育は「日本の大学英語教育に不可欠である」(深山 2000)し、また「日本における英語教育の行き詰まりを打開するきわめて有効な教授法」(横山 2005)でもある。近年国内の ESP 教育の研究は、法学、工学、医学、看護学の分野では行なわれているが、スポーツを含む体育学分野の調査研究は極めて少ない。

(2) 勤務校の国立体育単科大学でアンケート調査を実施したが、体育を専攻する学生は、工学部、水産学部、医学部など他学部の学生より海外に出る機会が多い反面、英語の授業でしか英語に触れない実態が明らかとなった。専門教員を対象にした調査では、体育学部における専門への橋渡しとしての ESP 教育に教員は「専門用語と基礎的文法を含む読解力養成」を望んでいる事が判明した。また平成 23 年度からの科研で、アスリートが 2 つの競技(ヨット、自転車)で海外遠征や試合に出た時頻りに会うコミュニケーション場面が、ヨットではプロテスト(抗議)で、自転車は移動時の道順を尋ねる際であることが判明した。また各場面で必要な語彙や表現を抽出していた。

(3) ハード面で勤務校には、「アスリート支援語学学習システム」(CHeru CaLabo EX)と、「グローバル支援語学学習システム」(Panasonic L3Stage EZV)が導入され、体育大学ながら 2 つの CALL システムを有していた。この CALL システムを活用し、トップアスリートの海外遠征時に役立つ英語学習ソフトを開発しようという着想に至った。

(4) 大学生向けの英語教材は各種出版されているが、大半は TOEIC 等資格試験対策や単語・文法・構文、リスニング、会話、読解等の教材で、海外のスポーツ大会や遠征に場面を限定したアスリート向けの語彙や表現、リスニング、会話、読解を学習できる ESP 教材はほとんどない。

### 2. 研究の目的

本研究では、以下の 3 つを明らかにすることを目的とした。

(1) アスリートが 2 つの競技(水泳、バレーボール)で海外遠征や試合に出た時、実際に出会う可能性の高い場面を抽出する。

(2) 各場面におけるコミュニケーションに必要な競技特有の英語の語彙や表現を抽出する。

(3) (1)(2)で明らかになった語彙や表現を使った実践的教材を作成し、CALL システムで教材を活用しアスリートの英語運用能力の向上をはかる。

### 3. 研究の方法

(1) 平成 27 年度の研究では、予定した 2 競技のうち、女子バレーボール部の海外(カナダ)遠征が実施され遠征後に、大会会場や遠征・合宿先で遭遇する場面のうち特に英語が必要となった場面について、女子バレー部の選手にアンケート調査を実施した。遠征前には、海外でのホームステイ等交流を主にした内容の教材を作成/配布し、英語によるコミュニケーションの事前指導を行った。また競技の規則集や大会要項等を集め、それを基に競技に特有の語彙、表現等を日本語と英語で抽出した。

(2) 平成 28 年度の研究では、2 つの競技の海外渡航に同行し前年度抽出した場面の映像を撮る予定にしていたが、海外渡航の機会は得られなかった。交流協定校 3 校のうち上海体育学院については、9 月東京で開催された ESP 関連の学会で、英語担当教員の ESP 教育に関する発表を聞き、情報交換を行った。また収集したスポーツ競技関連の教材を分析し、その内容や構成等を検討した。

(3) 平成 29 年度の研究では、これまでに抽出した場面を中心に、読み / 書く教材を作成した。例えば、競技前の競技に関する説明の読解や、メール等伝達中心の英作文などである。教材には場面別に必要な語彙、表現リストを合わせることにした。秋に本学学生を引率して出かけた上海体育学院（勤務校の交流協定校の一つ）では、学部の英語の授業を見せてもらったが、特に ESP 教育は行われていなかった。

(4) 平成 30 年度の研究では、当初予定したバレー、水泳の 2 つの競技に絞らず、海外で遭遇する場面を 2 つ（旅行者としての場面と、どんな競技にもほぼ共通するアスリート特有の場面）に分け、教材を作成することとした。前半の旅行者としての場面には、入国から宿泊、買物、移動を含め、後半のアスリート特有の場面に試合の準備・練習、試合、試合の応援、怪我と治療、メディア関連の対応（試合後のインタビュー、試合結果の新聞記事の読解など）を入れることとした。2 年次対象の初級レベルの授業で、市販されたスポーツ関連教材（『やさしい英語で学ぶ“スポーツは世界だ” & 英語の基礎』）を使って指導したが、それにスポーツ / 競技関連の語彙の練習問題や教材にない武道の読み物教材を追加する等試行し、体育 / スポーツを専攻する学生の ESP 教材に対する反応と指導の学習効果を見た。

#### 4. 研究成果

(1) 平成 27 年度の成果は、女子バレーにおける海外遠征時の英語のコミュニケーションに関するデータを集められたことである。回答者はバレーの競技歴が 10 年から 14 年の経験者ばかりで、海外遠征も一人をのぞき全員が経験していた。遠征先はカナダが多く、他に韓国、タイ、マレーシアとある。遠征先で使用された言語は、英語が一番多く、タイ語、韓国語、日本語の回答もあった。全員が海外遠征時の英語の必要性を認めているが、競技関連の専門的英語と日常に使う一般的英語や基礎的英語では、日常使う一般的 / 基礎的英語が必要と回答した学生が多かった。英語を必要とした具体的場面としては、まず「他国選手との交流」を全員が挙げ、次に「生活やホームステイ時」を挙げ、「事前準備を含む競技 / 大会関連」を挙げたのは 35% であった。カナダではバレー教室を開催したそうだが、「単語とジェスチャーでコミュニケーションがとれた」と回答した者もいた。カナダ遠征前に、ホームステイを念頭に交流を主にした教材を作成し事前指導をしたのは、的外れではなかったようだ。

(2) 平成 28 年度と平成 29 年度の成果は、国内外で出版されたスポーツ、競技関連の教材を購入 / 収集し、その内容と構成等を分析し、その結果をめざす ESP 教材の参考にできたことである。国内と海外で出版された教材の内容を比べると、海外のテキストは『English for Football』や『Career Paths Sports』など、やはり ESP 教育を念頭にスポーツの現場で英語のコミュニケーション能力を向上させることをめざし作成されたものが多く、国内のものは『ヨット関連ハンドブック』や『実践テニス英語』等大学等で教材として使えるものは少なく、競技者が海外の試合等に参加する時参考になるようなテキストが多いことがわかった。平成 28 年度に参加した東京で開催された ESP 関連の国際学会は、上海体育学院の教員をはじめ、ESP 教育に携わる海外の教員や研究者と情報交換できたことも成果の一つである。

(3) 平成 30 年度の成果は、これまでの 3 年間の調査や研究結果をもとに、海外遠征するトップアスリート向けの教材の構成と方向性が決まり、出版まで至らなかったが簡易なペーパー版ができたことである。当初予定した競技別（バレーと水泳）ではなく、様々な競技の選手にも使えるよう、各スポーツ競技で共通する場面を抽出し、前半を旅行者として遭遇する場面別に、後半をアスリート特有の場面別に作成することになった。海外経験の浅いアスリートは前半から、海外経験の豊富なアスリートは主に後半を学習してもらう予定である。

ここ数年勤務校で、スポーツを題材にした教材を使って学生の反応を見ているが、やはりスポーツ/武道の ESP 教育の可能性は非常に高いと考える。今後は勤務校でペーパー版を試用し、選手等からフィードバックをもらって改善し、冊子として出版したいと考えている。平成 30 年度 3 月参加したシンガポールの学会では、既に海外の多くの大学でカリキュラムに経済英語、工業英語など ESP 関連の授業があると知り、日本の大学の対応の遅れを実感したところである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。